

清末開港後の文教政策と文人王韜に関する一考察

大谷敏夫

A Study of Cultural, Educational Policy and Cultivated Man Wang-tao 王韜 after
Opening Ports to Foreign Trade in Late Qing 清 Dynasty.

Toshio OHTANI

はじめに

十九世紀中期に発生した二度に亘る阿片戦争に敗北したことにより、清朝は欧米諸国に対して全面的な開国にふみきるが、このことにより伝統文化を保持しつつ欧米文化の受容ということが重要な課題として識者に認識されるようになった。またこの時期中国文化に接した欧米人にとってもその文化の特質を説明することが中国との相互交流を深めるためにも必要であると考えていた。総じてこれら中国側の欧米文化研究、そしてまた欧米側の中国文

化研究の実態については、まだ十分に明らかにされていないといえる。従ってこの小論は以上の点に留意して、この時期に生存した文人王韜^①の生涯を通じて中国と欧米相互の文化交流の一端にふれてみよう。

(一) 開港後の清朝の対外交政策

第一次阿片戦争勃発前、広州に欽差大臣として派遣された林則徐は、阿片厳禁策を実施する為、イギリスとの対決をも辞さないという政策を取ったが、その一方では広州で欧米諸国に関する資

(1)

料の収集も行ない、欧米に関する従来の認識を改める必要も痛感していたと思われる。阿片戦争敗北後、林則徐は幕友魏源に自ら収集した資料を渡して海外諸国に関する研究を依頼するが、魏源はこれらの資料を基に自らの研究も加味して「海国図志」を刊行する。この著の中で魏源は外国との外交・貿易に関する策と共に、外国の進んだ軍事・産業技術を学ぶことを提案する。魏源がこの著を刊行した時期、清朝は第一次阿片戦争に敗北したにも拘らず開港地は五港に限定し貿易やキリスト教布教等にも制限を加へるなど、まだ従来の冊封体制の枠を大幅に変更するものとはいえなかった。それに加へて中国人の排外感情は強く、開港地に於いてしばしば中国人と外国人の衝突事件が続発していた。開港十年後に太平天国の乱が広西省の山村に発生したが、その三年後の一八五三年には江南の中心都市南京が攻略され、ここに天国の首都が定められた。天国はここを拠点として江南各地を攻略し、蘇州・上海・杭州等の主要都市にも戦火が及んでいた。そんな中で発生した第二次阿片戦争に敗北した清朝は一八五八年に天津条約、一八六〇年に北京条約を締結し欧米諸国との全面開国にふみきった。その為清朝は総理衙門を設置し、対外交渉を国際法の規約に従って処理する政策を正式に実施することとなった。これを契機として欧米諸国は清朝を全面的に援助する策を定め、天国との関係を完全にたちきった。条約締結後、清朝政府にあっては、対外和平策の推進者、恭親王とそれを支持する曾国藩・李鴻章等の漢人経世官僚が台頭したが、彼等は外国人の協力を得て自らが創設

した郷勇の力によって太平天国を鎮圧する一方、外国のすぐれた軍事・産業技術の導入を図って江南の都市に官督民弁の近代企業の建設を実現した。これら漢人官僚はその実現のため欧米の軍事・産業技術の研究の必要性を痛感し、それを研究する為の翻訳機関同文館を首都北京や江南の開港都市上海、更に広州に設置した。また外国との通商・外交の必要上、国際法の研究を痛感し、その為開港地に居住していたアメリカの宣教師マーチンに「国際法」の翻訳を依頼すると共に同文館の外国人教師に招聘した。ところでこれら外国人宣教師の中国渡来は、既に第一次阿片戦争前から始まっていた。当時宣教師は唯一の開港地広州に貿易許可期間だけ居住するか、或いはマラッカ、シンガポールに居住して中国事情を研究していた。これら宣教師の帰国報告や雑誌等が欧米人の中国情報を得る唯一の手段でもあった。第一次阿片戦争の結果締結された南京条約によって五港が開かれると宣教師はそこに居住して宣教活動や文化事業にものりだした。しかしこの五港以上にはイギリスの領土となった香港が外国人の对中国活動の拠点として重要な役目を果たすようになった。香港には主としてイギリスの宣教師が渡来し新聞・雑誌を発行して中国情報の収集・研究を促進した。この香港に渡来したイギリス宣教師団の一員にレッグがいた。

そしてこのレッグなど宣教師と交流のあったのが故あって香港に滞在していた王韜であり、この両者の間に親密な関係が生じた。この交友関係については後述するが、その前に北京条約後の清朝

の対外文教政策についてまとめておこう。先述したように清朝は北京条約後、開明的な漢人官僚の進出により、欧米の軍事・産業技術の導入や、文物の研究等が一段と促進される所謂「洋務運動」の時期に入るが、それが直ちに欧米の思想や制度の研究までには至らなかった。そこには中国の伝統思想を保持しようとする根強い官僚・士大夫が存在していた。その中心人物が大学士倭仁であった。倭仁は一八六二（同治元）年に工部尚書に起用され、政治や官界の刷新を陳情するが、その際、孔孟の古礼を採用することを進言した。彼は国政の根本は人心であり技術でないとし、古学の復興を提唱した。特に倭仁は一八六六（同治六）年、同文館の科目に英語・仏語・露語の他、天文・数学・化学・博物・公法を拡充し、特に一班を添設し、夷人を招いて天文・算学の兼習をやらせることに猛烈に反対した。

竊かに聞くに、立国の道は礼義を尚び、權謀を尚ばず。根本の圖は人心に在りて技芸に在らず。今之を一芸の末に求め、而して又夷人を奉じて師と為すは、夷人詭譎、未だ必ずしも其の精巧を伝へざるは論ずる無く、即ち教者誠教にして、学者誠学ならしむるも、成就する所の者は、術数の土に過ぎず。古今来未だ術数を持ちて、能く衰を起し弱を振る者有るを聞かざる也。天下の大は、才無きを患へず。如し天文算学を以て、必ず須らく講習すべく、博采旁求、必ず其の術に精なる者有るも、何ぞ必ずしも夷人に師事せん。且つ夷人は吾が仇也。

とあり、立国の道は礼義であって技芸でないとのべ、更に清朝の敵国であった欧米人を招いて、天文・算学を教授させることなど

してはならないと言っているのである。これに対して天文・算学の導入を是認していた恭親王は開明派官僚、曾国藩等に意見を求めそれに基づいて総理衙門としての意向を上奏する。彼はこの件について、曾国藩・左宗棠・李鴻章・郭嵩燾・蔣益澧等が同調しているとのべた上で

夷を奉じて師と為すと曰うは、輒ち師事名目を臆造して、人の嚮往を阻む。^⑤

とあり、この上奏後、総理衙門に受験する者がいたのに、倭仁が倡議してから、京師各省の士大夫が聚党私議して、約法を阻止し、甚しくは且つ根拠のない謠言を以って人心を煽惑する者ができたとという。そして、人心の失は、浮言を倡うる者が之を失うのであるとまでいう。また通政使于凌辰は、この問題発生により党患が已に萌じ、このことこそ國を危ふくするというのである。

今天文算学館甫^ほめて設け、而して争端即^すに啓く。争端啓けば則ち朋党必ず成る。夫れ天文算学は、本より技芸の末に属す。其れ果して能く力を得ると否とは、尚知る可からず。^⑥

とのべ、こんな問題で国論がわれることこそ問題があるというのである。この時期両論は並立したまま、今後の検討課題となった。但、洋学の導入に積極的に賛成していた曾国藩にしても、儒学を国家体制教学として尊重する点では倭仁と同様な考えをもっていた。曾国藩は若年倭仁より義理の学を学び、それに基づいて新儒学研究を進めていたのである。従って洋学研究はあくまで実用面に限定する考えをもっていた。曾国藩の後継者であった李鴻章に

なると、基本的には曾の新儒学を尊重しながらも、実用的な立場から洋学導入を曾にも増して進め、理念を固守する官僚群との間には明らかな差異がみられた。李鴻章は幕友に馮桂芬、鄭觀応・馬建忠等の実学派を任用し、所謂洋務政策を一層促進した。この中では馮が一番早い時期に李に任用されるが馮は同文館を上海・広州に設置することを進言した。そして亦、ここでの教科科目に算学・天文学等の自然科学をとりいれ、欧米人を講師として雇うことを主張した。

愚以為らく、同文館の法を推広するに如くは莫し。上海・広州をして仿照弁理、各一館を為り、近郡年十五歳以下の穎悟誠実の文章を募り、西人を聘して法の如く教習し、仍お品学兼優の挙貢生監を兼聘して、經史文芸を兼課して、其の上進の路を碍けず、三年期と為し学習成る有らば、調京考試、量りて録用を予う。

夫 敏 谷 大

とあり、この馮の進言は、李鴻章によって一八六三（同治二）年の「請設外国語言文字学館摺」となった。更に馮が「采西学議」の中で「西人を聘して諸国語言文字を以てし、又内地名師を聘して課するに經史等学を以てし、算学を兼習せしむ」といっているが、これこそ北京同文館が設立後加味した学科目であり、同治六年の總理衙門の算学採用の議は、馮の進言とそれを受けた李鴻章の献策があったのは自明の理である。ところで李は曾国藩と共に國際法の翻訳の必要性を進言していたが、總理衙門の認可のもとにそれをアメリカ人宣教師マーチンに依頼し、マーチンは、一八六三（同治二）年、京師同文館にてヘンリーウィートンの「國際

法原理」の全訳を行った。マーチンは其後同文館に勤務し、一八六七（同治六）年には同文館の國際法と經濟学を講義し、一八六九（同治八）年同文館の館長に就任し、彼の下に九名の外人教師が配属されるようになり、この頃になってその陣容は始めて整備されるようになった。

これは一つには、同文館に外国人講師を招聘して算学・天文館等技芸の学を学習させるのに極力反対していた倭仁が一八七一（同治十）年死去しその影響力が減退したことによるが、同じ頃死去した曾国藩の後継者李鴻章の政治的発言力が増したことによる。李は同治十二年直隸總督兼任の大学士となり、中央政府内の第一人者となったが、この年第一回アメリカ留学生が送られている。李はこのように名実共に清朝政界の第一人者となったが、彼に反対する勢力が皆無になつたわけではない。まず曾の後継者を自称していた湘系の左宗棠がおり、主として對外政策で東南を重視する李に対してロシアの進出を危惧する西北重視を主張していた。また湖北武昌の人、王家璧は同治初曾国藩、左宗棠の配下にあつた關係上、中央官庁に入ってから李の政策に反対する存在となつていた。彼は倭仁・曾の学術を評価し、洋学導入を急ぐ李を批判していた。王は李が清朝の官史採用は、章句弓馬だけで学ぶ所は実用的でなく、敵を禦ぐことはできないということで遂に科目を変えることを提議したのに対し、彼は本朝は弓馬によってその基礎を開き、文徳武功は前代よりはるかに優れており、銃砲はもちろん兼習すべきであるが、本来の学業をどうし

てすべて忘れなければならぬのかといい、更に章句によって官吏を採用することは、正に堯・舜・周公・孔子の道を崇重し、人が経書と史書を読み、大義を明らかにし、君臣父子の倫を教くすることをのぞむことにある云々といっている。これは一八七五（光緒元）年の王の上奏であるが、これとは対照的に李の幕友薛福成は同年「応詔陳言疏」を提出し、別に一科を設け洋務に洞達する者があつたら大臣の推薦を許すことを主張しており、洋務導入をめぐる保守派と改革派の相違点は益々顕著になってきた。しかし大勢としては、洋務導入派が優勢となり、一八七九（光緒五）年には貴州候補道羅應旒が李の意を受けて上奏し、詞章を捨てて外に別に専科の理なしとまでのべ、一八八四（光緒十）年に李の幕友鄭観応が「考試」を論じ、取士の法として科目を広くして人材を萃めることを論じている。以上開港後の清朝の文教政策を略述したが、「夷の長技を師とする」という魏源の提言は北京条約後にあつて開明派の基本路線となつていたものの中国の伝統的な理念を擁護する思想は根強く、実用を優先する政策はスムーズに進まなかつたと言えよう。しかし欧米の政治的・経済的・軍事的圧力が増すにつれ、理念よりも実用を先行する李鴻章の路線が優勢となつてきた。それは文教面でもみられたのである。一八八四年・八五年の清仏戦争は、中国の洋務の進行状態を凶る尺度をなすものでもあつたが、これが清朝の敗北に終つたことは、その先行にある種の警告となるものとなつた。次章では、開港後から清朝の洋務政策が失敗であつたことを実証した日清戦争後まで生存

していた文人王韜の人生の軌跡を辿ることによって文教活動の面で果たした役割を明らかにする。

(二) 王韜の生涯と文教活動

王韜の生涯については、「攷園老民自伝」に自らが記したものであるが、それによると一八三八（道光十八）年十月蘇州城外長の甫里村に生れた。父は諱は昌桂といい、家が貧しい中で刻苦自勵、故郷で教育者となつていた。王韜は初名を利賓といつたが、其後瀚ついで韜と改名している。彼は幼少より性情曠逸で、仕進を樂たのはなかつたが、一八四六（道光二十六）年秀才となつている。しかし挙人の考試には失敗し、科擧を断念した。この頃彼は上海にきていたイギリス人宣教師メドハースト、エドキンス、ミューヘッド等と親しくなり、一八四九（道光二十九）年、上海に設立されていたメドハースト経営の墨海書院の中国人教師となつた。墨海書院は南京条約成立の翌年早くも設立されたものであり、一八四五年寧波に設立された英華書院と共に著名であつたが、馮桂芬もこの両書院は蔵書も多くあるとのべ、西学研究にとつて重要な機関であると考えていた。時あたかも太平天国の乱が発生し、太平軍はまたたく間に一八五三（咸豊三）年南京を攻略し、ここを首都として戦火は江南の諸都市にも及んできた。彼はこの事態に対して咸豊八年江南防衛策として和戎・防海・珥盜の三大端を江蘇巡撫徐有壬に進言する。当時両江総督は何桂清であつたが、

何と徐の意見は合わず、恐らくこの策は反故（は）にされたものと思われる。徐自身も其後の太平軍の猛攻によって蘇州で自尽している。咸豐十年金陵大宮が潰れると、忠王李秀成率いる太平軍は一挙に呉・常・蘇・太を同時攻略し、蘇州は陥落、江南は半ば太平軍の勢力下に入ることになる。その際馮桂芬を始め蘇州の郷紳は上海に逃亡する。ここに彼はそれまでの団練が貪慾で詐偽をしておそれおののいて、ちっとも恃むことができないのを知り、屢々當事者に上書して方略を画したが、彼等は外面では王の策をずば抜けていると評価しながらも内面では之をいみねたんでいたという。但彼の進言で頗る施行を見て、能い効果があったのは、特に西人を以て領隊官と為し火器を使用して江南の郷民を教授させたことである。この時編成されたものを洋槍隊といったが、これが所謂イギリス人ゴード率いる常勝軍である。ところが自伝によるとこの功績をねたまれて彼は中傷されることになったとある。時あたかも太平軍が蘇州に偽官を偏く設け土著の人を董事としたが、彼はこれら董事と密に連絡をとってねがえりを説いていたことが敵に通じているという中傷の原因となった。彼はそこで清軍に逮捕されると思い、上海に移りイギリス領事の保護のもとに香港に亡命したという。以上が彼の「自伝」に基づく行動の要約であるが、その際「自伝」にふれていないことで、彼が黄畹の変名で太平天国の蘇州守将に上書して上海攻略の方途その他軍事上の献策を行ったのではないかということが現代の史学家の考証により指摘されている。

すなわち太平軍蘇福省民務を総理する劉天義に献上した文書であり、一八六二年三月この文書が上海付近の王家寺にあって清軍の分捕る所となり、清政府は即ちに「通賊」の罪名で上海租界に彼の引渡治罪を要求したが、英国領事は彼を庇護して、香港に逃亡させたということである。この文書については、民国二十七年刊行の謝興堯の「關於上海在太平天国時代之史料攷補」七の「與太平軍在上海最有價值之文獻——王韜上太平軍取上海策」に記されている。又、王韜が太平天国と深い関係があったことについては、「読小滄桑記」に「太平朝科挙與王韜」と題して記されている。これによると天国は彼に太平状元を与えたとある。更に同書に同治元年清廷が彼を捕へようとした時、彼が墨海書院にて外人保護を受けていたので得ることができなかったこと、そこで上海の英国領事に引渡しを交渉した際、上海道呉煦が甘言を用いて彼に害を加へないことを保証するので外人に彼を送出することを願った文が記されている。これらの資料からみると王韜が太平天国と関係があったことはかなり信憑性がある。しかし当時太平天国の占領下にあつて江南の士大夫の中で太平軍と通じたとして告発された著名人は何人かいたのは事実であり、このことについては更なる研究のつみ重ねが必要であろう。ところで王韜は、領事のはからいで香港に亡命したが、その際香港在任の英人レッグに書を与えている。

船里は呉門を去ること尚四十里。蓋し皆居民にして賊窟に非ず、固より蘇瀝の通道也。方に瀝に回るを擬すに、忽ち聞くに官軍賊書を緝獲

し、指して韜の作と為す。當事察せず、竟に「通賊」を論じ、忌諱する者衆く、百喙明らかにする莫し。然して韜竟に危を冒して滬に住くは、誠に區區の心を以て、他無しと白う可し。蓋し進みて甘じて隕首の誅を蒙り、而して退きて甘じて附賊の罪を受けず、其志も亦断じて識る可し。而して麥領事、慕西士其愚を洞鑿し、力めて斡旋を為し、徒に死して悪名を被むるを致さず、死を逃れて南陲にて、執事に逢うを得。……^②

とあり、自分は決して通賊していないと断じている。ところでこの信書の相手であったレッグであるが、この香港亡命直後からかなり長い間交友関係があり、彼の人生にもっともかかわった人物であった。レッグは一八一五年イギリスのスコットランド、アバディーン近郊に生れ、一八三八年ロンドン伝道会に入り、一八四〇年、海外伝道のためマラッカに赴任、同地の英華書院の院長となり、一八四二年香港が英領となった後、同書院を当地に移し、それから一八七〇年代までの約三十年間に亘ってここで院長を勤めた。その間帰国してロンドンに滞在したり、また長崎を訪問したりしたこともあったが、彼は布教の側ら中国思想の研究に没頭し中国経書の翻訳に尽力した。ところでレッグは香港滞在中太平洋天国の首領の一人洪仁玕との交流があり洪は現地人説教師としてロンドン会に関係していた。^③ここにレッグを通じてかの容闈が洪と会っており、後彼が天京に洪を訪問したのはこれが契機となっていたわけである。ところで「干王洪仁玕口供」に、洪が一八五三年癸丑に香港に遊び、書を夷牧に授けたこと、更に一八五四年

甲寅に上海洋人が洪の南京に行くのを承知しなかったので、夷館に在って天文歴数を学習し、是冬香港に戻り、なお天文を習い、夷牧に授教したことなどが記されているが、ここから洪がこの頃香港、上海間を往来していたことと共に夷牧（外国人の行政官）の信頼も得ていたことがわかる。

さて、レッグは一八七三年帰国後、オックスフォード大学の教授となり中国経書に関する教授を行ない、中国思想の紹介につとめた。王韜はレッグが帰国する際、送別文を書いたが、その中で彼がメドハースト等と共に東遊した時は、最年少であったが学識人品とも卓然人と異っていたという。^④そして当時東遊したミューヘッド、ブリジマン、エドキンス、ワイリー、ホブソン、マッゴーワン、マーチン等の人々は西学を中国に通ずることで貢献したが、中国経籍を西国に通ずることには及んでいなかった。ただレッグのみがその難を憚らず、全力で十三経を注した。そして経を言うや、一家を主とせず、一説を専にせず、博く采りあまねくふれて、務めて其通を極め、大抵は孔・鄭より取材して程朱に折衷し、漢宋の学において、両つながら偏祖は無かったという。このように王韜はレッグの経書研究は、学問的な厳正な態度で当っており、この点では中国人の経学研究にそれがみられなくなったのべ、更に

先生は独り西国の儒宗を以て抗心媚古、……中略……その志は羣經を悉く訳述有るを欲し、以て其の後学に嘉惠するの心を広む^⑤とのべ、レッグの経書研究の意気盛んな点を礼賛している。この

レグの経書翻訳を幫助したのが王韜であり、これが認められて彼は一八六七（同治六）年より一八七〇年に至る三年間、レグに随つて英国に渡るが、当地で訳書の仕事を続けると共にフランス、ロシア等の国を遊歴し、国情調査を行っている。帰国した王韜は、同治十年、レグが解散した英華書院を該院の買弁黄平甫と集股購入し、名を中華印務総局とかえ、日報の発刊を志す。それと共に一八七一年秋発生した普仏戦争に対して、その前後の事実を綜して、「普法戦紀」を著した。彼はその前序に「余の普法戦時を志すは、豈独り普法を志さん哉。欧州全局の枢機此に摠括す。普強く法弱し、此れ欧州変局の由来する所也」とのべている。この著が刊行されると、泰西掌故を談ずる者は此を以て鑑と為す可しと評判になった。この王韜の外游と其後の文筆活動が評価されて、清朝の高官の中にもそれを尊重するものもでてきた。すなわち開明派官僚丁日昌が尤も彼を賞識し、当時時務に通達し、外情に熟稔するは老民（王韜）に若くは莫しと謂つたので、彼の見識を学びたいという地方官が全国各地に現われるようになった。帰国後発刊した「日報」は一八七四（同治十三）年「循環日報」と称するようになった。循環とは「終りて始めに復し循環してやまず」という語に示されているように、この世は絶えず変化をくりかえすという変の意義を強調したものである。もっとも彼はこのような変化する世の中にあつても中国の根本理念は不動であると言っている。ところで彼はこの「日報」の論説の内時事に関するものを集めて「外篇」にまとめたがその学識の淵博、眼光の遠

大さでは一時両なしと言われた。これより以後上海・シンガポール等の地の報紙漸く興り、互いに相い転録するという盛大さを極めるようになった。報紙発刊の意義は、中国人が自ら資金を集め、自らの見解による論説を掲載するようになったことであろう。このように香港に戻った王韜は新聞の主筆、著書の刊行とめまぐるしく活躍する。当時彼の関心は欧米列強のうちでとりわけ仏の動向であつた。それは当時フランスは越（ベトナム）に進出し、その保護国化をめざしていたので宗主国清朝と対立する様相を深めていたからである。彼は①「越南通商禦侮説」②「越南當親法自存」を書くが、①の中で

蓋し越南は固より我中朝の属国也。分を以て言えば則ち屏藩、勢を以て言えば則ち唇齒也。越南一旦果して法の所有と為れば則ち川滇も亦虞る可きに在り。

とあり、越南が仏の所有となれば、川（四川）・滇（雲南）も危くなるとのべ、その対策として、総理衙門が歐洲列国公使と酌商して今後各国通商は互いに相い保衛し、以て泰西各国が人の国を滅ぼすを以て己が利と為さざるを明らかにしたらよいというのである。そして

然後我れ勵精圖治、振作為す有り。鎗砲を製し舟艦を造り兵旅を練し賢才を挙げ、西国の語言文字を学習し、以て彼此の情に通ず。

とのべ、西洋の軍事技術を学び、そのため語言文字を学習し、西洋の事情に通ずることが肝要であるというのである。特に彼はこの西論文で盛んに「万国公法」に通ずることの意味をといっている

が、これは第一章でのべたように、総理衙門の重視するところとなった。ところで彼は仏をけんせいする為に、通商を求める英の力を十分に利用することをといているのは、かの魏源の三策の一つ、「夷を以て夷を款す」とのべるところによつてゐる。

ところで王韜が強い関心を示した外国は、一八六八年江戸幕府を打倒した日本の明治政府であった。特に兩國の間に生じた外交問題であった琉球の帰属に関する事であった。彼は琉球問題に関して①「琉球朝貢考」②「琉球向帰日本辨」③「駁日人言取琉球有十證」(巻六)④「琉事不足辨」(巻六)等の論文を書き、歴史的にみても琉球は中国の朝貢国であり日本の領土でないことを立証した。しかし現実には日本の琉球兼併が着々と進んでいるとのべ、日本琉球を兼併して自り、西人は事を論ずる者、輒ち偏祖多し。蓋し日本西法を歩武して自り以来、自ら以て漸く富強の效を著すを以て、而して駁然として域外の觀を馳す^⑤。

とあり、西人までいつも日本を重視して中朝を軽視しているとのべ、それは西人が中朝の属国である越南、暹羅、緬甸、高麗を狙っているからであるという。従つてこのような日本及び西人の中朝に対する侮蔑に対しては、「臥薪嘗膽」の暇もないので、ただ奮起して成功を求めて事をなすことであり、それにはすみやかに自強の計を図ることであるという。その計とは、

海防を整頓し、軍艦を製造し、水師を演練するは、此れ外を治する者也。人才を延攬し、牧令を簡選し、俊良を登崇するは、此れ内を治する者也。外治すれば則ち兵力強く、内治すれば則ち民心固る^⑥。

とあり、ここでも彼は今すぐ自強の計を図ることが大切であるというのである。日本に関心をもつた王韜は一八七九(光緒五年)年日本に行くことを決意する。上海から乗船、長崎に上陸そこから下関・神戸・大阪・京都の諸名勝を遍歴し、最終目的地東京に行った。この東方滞在中に彼は清朝初代正使何如璋、副使張斯桂、參贊黃遵憲に会見した。日本と清朝は一八七三年、日清修好条規が批准され、正式国交が樹立され、これに基づく初代駐日公使が日本に派遣されたが、一八七六(明治十・光緒二)年西南戦争が起り、何如璋一行の日本到着はその翌年になっていた。ところで副使張斯桂は彼がかつて上海で会ったことがあり、銳意西学を研究していた開明的な人物であり、彼を高く評価していた人物である。また黃遵憲は、帰国後「日本国志」を著し、日本研究の先べんをつけた人物である。特に黄は日本の明治維新、その功勞者として西郷隆盛に関心をもつた^⑦。黄は後開明的な官僚として戊戌変法期湖南按察使として維新事業を推進したのもこの時の来日が機えんとなつたものと思われる。この黄の影響からか王韜も西郷隆盛に関心をもつた。

嗚呼天下の梟雄梁帥、大義に昧く、躬は叛逆と為す、安ぞ亡に底らざる有らん哉……鹿兒島人、勇を好み戦を善くす、向來力を國家に宣す。乃ち一旦謀叛、身は顯戮を膺く、前日殊勲之を流水に付す。此れ他無く順逆明らならざる也。西郷赫赫の功を以て、而して終に欺に勝う可からざらん哉^⑧。

とのべ、西郷は叛逆者となつたが、明治維新に際しての功勞者で

あり、何故このような結末にならざるを得なかったということも惜んでいる。また熊本城にて西郷の進軍をはばんだ谷干城について谷が西郷を詠じた詩に

王師に枉抗して身を顧みず多年の功績風塵に委す、君の末路初志に違へるを憐む、春雨春風、更新を恨む。^⑤

とあり、西郷の功を甲んで其の不終を歎じた二十八字の中に無限の感慨があり、これを聞いて日人西郷も亦近代の梟雄為るに足ると谷の詩に共感している。ここには西郷のことを論ずると共に自ら信念に基づいて行なったかつての行動に対して叛逆のレッテルをはられた思いもあつたのであろう。一八八三（光緒九）年、彼は香港にてこれまでの論文を集めて「菑園文録外編」八巻を刊行する。その翌年丁日昌の力添えもあり、李鴻章の黙許を得て正式に上海に帰ることができ、格致書院に勤務する。

この年王韜が危惧した通り越南をめぐる清仏戦争が勃発する。戦争は翌年終結し、李鴻章・パトリートル条約によって清朝は安南に対する宗主権をフランスに譲渡す。その後フランスはコーチシナ、カンボジア、アンナン、トンキン、ラオスを一体としたフランス領インドシナ連邦を成立させる。清仏戦争の敗北は軍事中心の洋務運動に限界がみえ、陳熾が一八九二年「庸書」を出版して変法の必要性をとき、それに続く変法論が続出する。^⑥これは更に一八九四年の日清戦争の勃発とその敗北による翌年締結した下関条約によって清朝の開明的な官僚や知識人は変法の必要性を痛感することになる。これから変法運動が高まるが、その中で王韜

の著書も結構注目されていた。唐才常は彼の「法国志略」は西史に通ずる第一の書であると絶賛している。^⑦王韜自身一八九七（光緒二十三年）馮桂芬の著作「校邠廬抗議」を校印したが、その際跋文を書く

西学を行う可きを知りて仿效を惜まず、中法の已に叛するを治す……此れ今時有用の書なり^⑧

とあり、一八六一（咸豊十一年）年刊行になるこの著の現代的意義をといっている。この著は内政改革の原理を復古に求め、富強の術を西学から採るべきことを主張した書であるが、彼はこの思想は現代でも生きていると考えたのである。この著は開明派官僚張之洞の助言によって、広く中央・地方の行政官に講読を勧めたものであった。また帝党翁同龢も既に光緒十五年にこの著の若干篇章を光緒帝に進呈して帝に変法の意向を促したものである。この点から考えると帝や改革派官僚のめざす戊戌新政は、中国の思想を体とし、西洋の思想は技術のみならず制度も含めて用とする所謂張之洞の中体西用論に依拠したものであり、これは馮や王のとく内政・外交論と一致していた。王は「変法」について論じているが

夫れ孔の道は人道也。人類盡きざれば、其道変らず。三綱五倫、生人の初め已に具わり、能く人の分の為すべき所を盡し、乃ち憾む無かる可し。

とあり、孔道・三綱五倫は不変なものとしている。これに基づいた上で変ずべきものとしてあげたものが、取士の法、練兵の法、

学校の虚文、律例の繁文である。ここにはまだ議院を開くという構想はないが、これらのことを実施するに際し、西法から学ぶべきだといっている点に王の開明性があつたのである。ところで王の文教活動に果した役割として最も注目されるのは、何といつてもそのジャーナリストとしての側面であつた。そこで次章ではこの点に焦点をしばつてのべることにする。

ジャーナリスト王韜

イギリス宣教師モリソンが一八一三年マラッカに「英華学堂」を創設し、一八一五年にミルンが「察世俗毎月統記伝」を創刊するが、これに続いて一八三三（道光十三年）廣州で「東西洋考毎月統記伝」が発刊され、これは四年後シンガポールに移されるが、これらは布教目的だけでなく日々の情報活動も行つていた。広東に赴任した林則徐は「東西洋考毎月統記伝」を早速蒐集し、情報分析に使つていた。南京条約締結後、英華書院が香港に移り、ここに多くの教士が欧米より渡来してきたことについては先述した通りである。また新たな開港地上海には墨海書院が開設されると共に一八五二年エドキンスにより「中西通書」なる報紙が刊行された。ところで咸豊五年香港で月刊の「遐邇貫珍」が刊行されるが、それ以後の報紙について王韜は

咸豊三年、始めて遐邇貫珍の香港に刻する有り、理（学士）雅各、麥領事華陀 其事を主とす。七年六合叢談上海に刻す。偉烈亞力其事を

主とす。採搜頗る広し。同時に中外新報寧波に刻する有り。瑪高温、應思理迭に其事を主とす。同治元年、上海に中西雜述を刊す。英人麥嘉湖其事を主とす。嗣いで皆告止す。近ごろ則ち上海に教会新報有り。日一編、後改めて万国公報と為す。林君樂知其事を主とす。而して中西聞見録も亦京師に刊す。艾君約瑟、丁君題良其事を主とす。顧るにこれ皆毎月一編なる者、兼ねて格致雜学、器芸新法を講ず、尚時事に於て簡略^⑧。

とあり、概略を説明している。ここにもあるようにこれら報紙の刊行者は中国に渡来した宣教師であり、中国人ではなかつたのである。

また報紙は格致雜学、器芸新法を講じているが時事に簡略とあるように、この点にもたたりなさを感じていたのである。彼は外人辦ずる所の西学日報に対して、自ら西文報紙を創むることを主張してゐた。

其の主筆を為す者、おおむね皆な久しく中土に居り内地情形に稔悉なり。且つ其の言う所の論は、往往中を抑へて而して外を揚ぐ。甚しきに至りては黑白混淆、是非倒置す。泰西の人、祇洋文を識り、其の言う所を信じて確実と為す。中外交渉の事に遇へば則ち先人の言有れば主と為す。而して中国自ら之と争い難し。今我れ自ら改むるを為し、其の顛末を備述す、而して曲直則ち見わる。彼又何に従りて以て其の鼓簧を逞せん哉^⑨。

とあり、西洋人が主筆であれば、中を抑へて外を揚ぐ論説となり、是非倒置して中国に不利益なことになるといふのである。このよ

うな中で発刊された「申報」の主筆F、メジャーの言葉を彼は「上海字林報」の跋文にのせている。因みに「申報」は一八七二（同治十一年）、中国茶の貿易商メジャーが上海で刊行したものであり「字林報」は同治元年、伍徳・林榮知等が編輯者となって上海で「上海新報」として発刊され、その中文版を「字林報」と命名していたものであり、この「字林報」に王韜が跋文を書いてい

る。
是故中国今日の計を為すは、泰西諸国と深交厚結し、輯睦の誼を講ずるに如かず。盟約の信を修むれば則ち無事に相安じ、永く不敗を立つ可し。^⑤

とのべたのに対して、メジャーは泰西諸国と結好和を言うは固よりであるが、やはり中国が富強になってこそこれが生きてくるといい

夫 敏 谷 大

蓋し天下の事、能く守りて然後能く戦い、然後能く和す。否ざれば則ち我局之を人に操られ、而して之を己に操られず。^⑥

とのべている。「中報」の刊行は、王韜にいよいよ自分が主筆となつて充実した報紙の出版を決意させ、一八七四（同治十三年）、それまでの日報を改名して「循環日報」を創刊するのである。^⑦とここで先述したようにこの日報の論説と精華を収集して一八八三（光緒九年）年「強園文録外編」を出版し、変法自強に関する自説を公表する。その中で彼は中国が変法自強の為洋務が必要だと言いつながらも今だにほとんど泰西の情に熟悉していないとのべた後で、彼處は則ち繙訳官員を設けし、教中の神父牧師に及ぶまで、華言を效

い、漢字を識り、心を我國の政治に留め、我の俗尚 風土 山川 形勢 物産民情に於て、悉く皆之を勅して書を成し、以て其國中の民に教う。而して向時中国の能く泰西言語を操し、能く英人文字を識る者、當軸者は輒深く惡み痛く嫉み、中国文士も亦之を鄙して與に交わるを屑とせず、而して其人も亦類ね多く赤貧無頼、浅見寡識、泰西の政事得失、制度變革に於て毫も関心せず。^⑧

とあり、泰西諸国は中国研究に熱心であるのに中国では泰西言語を操し、英人文字を識る者を当局者は惡み嫉み、また文人も彼等をさけて交わらないから皆な貧乏であり、泰西の政治や制度に関心をもたなくなると言うのであるが、これは彼自らの人生を省みてのことであつたことは明らかである。すなわち彼が交際した英人レッグや英国の中国に対する姿勢と彼を追放した中国当局と文人の対応にこれらのことがみられるのである。更に

西人凡そ政事に於て鉅細を論ずる無く、悉く日報に載す。洋務を知らんと欲すれば、先づ其の載する所の各條を將つて一々訳出し、日積日累、自然に漸く其深を知り、而して彼通情なし。^⑨

とあり、洋務を知るには日報の果す役割を重視している。彼は以上の事をのべたのは、今から二十七八年前の咸豊初元のことであるといっているが、光緒の今日では中国もようやく洋務の必要性を悟つたとまとめている。

ところで「循環日報」発刊の同治十三年、容閔により「匯報」が上海に創刊されたが、その投資者は粵人が多く、招商局の總辦唐景星が経営に當つた。^⑩しかし総主筆は英人葛理を延しており、

そこが「循環日報」と相違していた。「申報」も英人美查が主筆であったから中国人が主筆をつとめた「循環日報」はその点中国最初の中国人経営、主筆からなる報紙であったといえる。これは日頃の彼の主張であり、その実現のため尽力した成果であった。これが契機となって変法運動の高まりの中で多くの報紙が発刊されることになり、彼はその先べん者となったといえる。

おわりに

この小論は開港後登場してきた中国最初の国際的感覚をもった文人王韜について研究したのであるが、同時代人としては容闈がおり彼等がいずれも洋務を推行了た曾国藩、李鴻章、丁日昌等の漢人官僚にそれなりの評価を得ていたことである。もっとも王韜の場合は太平天国に通じていたという罪名により十数年以上亡命を余儀なくされていたが、容赦されて以後は自説を出版することによって洋務思想の普及に尽力した。こんな中から嚴復のような人物もでてきたと思われる。嚴復が福州造船廠付設の海軍学校を卒業してイギリスに留学したのは一八七七（光緒三）年であり五年帰国して直隸総督李鴻章の要請により北洋水師学堂の総教習になり富強をとくのである。ところで嚴復と王韜の西洋思想のとりえ方の共通性について、シュボルツが興味ある見解をのべている。^④すなわち「嚴復はキリスト教の伝統と十八・十九世紀におけるヨーロッパの無神論思想とのあいだの衝突に、もっとも早く気づ

いた中国人の一人である。この点で嚴復に先んじていたのは、かの「洋務」専門家、王韜だけであった。王韜は実証主義と呼ばれるものの存在を漠然と耳にしてこれを宣教師に対する武器として用いた。」とのべている。ここには王韜も嚴復もキリスト教神学に対しては受容せず、西洋思想にみられる無神論思想、実証主義に注目し、それを宣教師から引き出した点である。王韜にしる嚴復にしる彼等は洋務を主張して西洋思想の紹介及び導入につとめるが、結局は伝統思想の枠内にあったということだけでは彼等の思想の本質を論じたことにはない。嚴復に関しては前記シュボルツの卓越した研究はあるが、王韜に関しては西洋思想の受容と伝統思想の保持・変質といった側面から研究した者はほとんどないのでこれは今後の課題として設定しておこう。

注

- ① 王韜に関する資料として、主に「弢園文録外編」（中華書局出版、一九五九刊行）を使用した。説明によるとこの排印本は、光緒九年（一八八三）本を根拠として、光緒二十七年（一八九七）上海にて重排したものによっているとある。
- ② 『道咸同光四朝奏議 五』所収「請罷同文館疏」同治六年（台湾商務印書館発行）
- ③ 『道咸同光四朝奏議 五』所収「遵議倭仁條陳疏」同治六年（台湾商務印書館発行）
- ④ 『道咸同光四朝奏議 五』所収「請潛消党患疏」同治六年（台湾商務印書館発行）
- ⑤ 大谷孝太郎著『儒將曾国藩』本論 第八章参照（東京布井出版、

昭和五十二年五月)

曾の「漢学」と「宋学」を「礼」の中に綜合しようとした思想は、倭仁に通ずるものがある。

拙著『中国近代政治思想史概説』(汲古書院、一九九三年発行)第三章、第二節 (3)参照

⑦ 馮桂芬『校邠廬抗議』附「上海設立同文館議」

⑧ 『李文忠公全集 一』所収(文海出版社印行)「李文忠公奏稿 卷三、同治二年正月二十二日

互市二十年來 彼酋之習我語言文字者不少。其尤者能說我經史、於朝章憲典吏治民情、言之歷歷、而我官員紳士中、絶少通習外國語言文字之人。各國在滬均設立繙譯官一二員、遇中外大臣會商之事、皆憑外國繙譯官、伝述商保、無偏袒捏架情弊。中國能通洋語者、僅恃通事、凡関局軍營交涉事務、無非雇覓通事、往來傳話、而其人遂為洋務之大害。

又、同書「李文忠奏稿 卷三、同治四年七月二十二日の条「覆保馮桂芬片」に

「臣在翰林時、即與馮桂芬相識、服其學問精治。及統兵至滬、復經奏留、臣營藉資贊助、隨時諮訪地方利病。嗣於上海設立外國語言文字館……該員好學深思、博通今古、喜為經世之學」とある。

⑨ 注7の書

⑩ マーチンについては、ジョナサン、スペンス、三石善吉訳『中国を変えた西洋人顧問』(一九七五、九 講談社)第五章「マーチンとフライヤー」参照

⑪ 注8の著『奏稿卷三十、「駐洋幼童互撥經費摺」に「竊臣鴻臚章前與原任大学士两江督臣曾国藩奏請挑選幼童、赴美国肄業、以求洋人擅長之技、而為中国自強之圖。當經總理衙門核覆奏准、自同治十一年起至光緒元年止、每年挑選幼童三十名共合一百二十名……在案。

⑫ 拙著注6の書、第三章、第二節 (3)参照

⑬ 王家璧については、『鹿大史学』第四十一号、四十二号(平成六年三月、平成七年一月)大谷敏夫、上園正人「光緒元年における

海防をめぐる論議(訳注)参照

⑭ 拙著『清代政治思想と阿片戦争』第一章第四節 二、三 参照

⑮ 王韜注①の書 所収

⑯ 馮桂芬注⑦の著 下篇「采西学議」

⑰ 王韜注①の書 所収

徐有壬については『清史稿』卷三百九十五、徐は何桂清の推薦で江蘇巡撫になったが、阿附する所無く、太平軍の江南進軍に際し何桂清が常州を棄てて守らず、その責任を問われたことに対して桂清に抗疏して徐を劾した。

⑱ 何桂清については『清史稿』卷三百九十七、咸豐七年以降兩江總督。

「桂清至蘇州、巡撫徐有壬拒勿納、疏劾其棄城喪師狀。……蘇州亦陷、有壬殉之、遺疏再劾桂清、詔褫職逮京治罪」とある。

⑲ 王韜注①の書 所収

⑳ 王韜注①の書 所収

㉑ 謝興堯輯『太平天国叢書十三種』瑤齋叢刻本(華文書局印行、民國二十七年刊本影印)第一輯 論著題跋 關於「上海在太平天国時代」之史料補 七、與「太平軍在上海」最有價值之文獻——王韜上太平軍取上海策「説小滄桑記」三、太平朝科挙與王韜

注②の著「説小滄桑記」

㉒ WYIS MEMORIALS OF PROTESTANT MISSIONARIES TO THE CHINESE. (成文出版 民國56年、理雅各) AMES LEGGE

㉓ 『西学東漸記 容闈自伝』(東洋文庫 136)『百瀬弘訳注(平凡社)

注②の書 所収 第二輯 珍籍彙編

㉔ 注①の書 所収 卷八「送西儒理雅各回國序」

右に同じ

㉕ 戈公振『中國報学史』(太平書局 一九六四)第四章 民報勃興時期 第一節 日報之先導

㉖ 注①の書 所収 卷八「普法戰紀前序」

㉗ 注①の書 所収 卷十一「救國老民自伝」丁日昌については『清

史稿』卷四百四十八

③① 注②③と同じ

③② 注①の書卷六 所収

③③ 右に同じ

③④ 注①の書卷六「琉事不足辨」所収 尚清末のジャーナリズムと琉球問題に関しては、西里喜行「清末のジャーナリズムと琉球問題(三編)」『琉球大学教育学部紀要』第54集 所収に詳細な研究がある。

③⑤ 注②の書に同じ

③⑥ 注④の著 付論 三「西郷隆盛と中国思想」

③⑦ 王韜「扶桑遊記」『小方壺齋輿地叢鈔第十帙』所収(台湾 学生書局印行)

③⑧ 右に同じ

③⑨ 拙著注⑥の著、参照

④① 『唐才常集』卷一「史学論略」(中華書局 一九八二年)

④② 戴揚本「馮桂芬与校邠廬抗議」『校邠廬抗議』醒獅叢書 所収(中州古籍出版社、一九九八)

④③ 注①の書 所収 卷一、変法上

④④ 注①の書 所収 卷七、論日報漸行於中土

④⑤ 尚この資料にてくる洋人については注②③の書に記されている。

偉烈 equal ALEXANDER WYLIE

瑪高温 DANIEL JEROME MACGOWAN

應思理 ELIAS B INSLEE

麥嘉湖 JOHN MACGOWAN

艾約瑟 JOSEPH EDKINS

丁禮良 WILLIAM A. P. MARTIN

林樂知 YOUNG JOHN ALLAN

④⑥ 注②の著 第三章 第三節に外人辦ずる所の西字日報に対して、自ら西文報紙を主張した人物として王韜をあげ、彼の方照軒軍門に上る書を引用している。

④⑦ 注①の書 所収 卷十 跋上海字林西報後

④⑧ 右に同じ

④⑨ 循環日報と王韜については卓南生『中国近代新聞成立史』(ベリカ社、一九九〇年十二月刊行) 所収、第九章「中国人により成り功した最初の華字日刊紙——循環日報」に詳細な研究がある。

④⑩ また西里喜行「王韜と循環日報」『東洋史研究』第四十三卷 第三号 参照

④⑪ 注①の書 卷二 洋務上

④⑫ 右に同じ

④⑬ 注②の著 第四章 第一節

④⑭ 尚王韜が招商局を担った徐潤・盛宣懷・唐景星と交遊があったことは、彼が日本を訪問した時期に会っていることとわかる。すなわち「扶桑遊記」に「光緒五年閏三月初八日 往訪徐雨之盛杏蓀二觀察清談……七月十五日、住見唐景星徐雨之兩觀察……とある。

④⑮ B・I・シユウォル著 平野健一郎訳『中国の近代化と知識人』所収、「第二章 初期の敵復」(一九七八年四月、東京大学出版会)